

ヘリで負傷者搬送訓練

古川署 民間のヘリポート活用

古川署は2日、大規模地震で陸路が寸断されたことを想定し、県警ヘリを使った負傷者搬送訓練を行った。田尻総合体育館から尾西食品宮城工場（古川清水新田）のヘリポートまで要救助者を送り届け、相互連携を確認した。

地震想定し連携確認

東日本大震災の体験 対応を強化しよう、とを風化させず災害時の 同署と県警航空隊、同



工場が参加して実施。訓練は、大規模地震で負傷した30代の男性を、ヘリで同工場のヘリポートへ空輸し、大崎市民病院へ搬送する想定で行った。

ヘリは同体育館グラウンドで負傷者を乗せて飛び立ち、直線で約10分離れた同工場第2工場屋上のヘリポートに着陸。負傷者を送り届けた。

ヘリポートでは操縦士が離着陸訓練（タッチ・アンド・ゴー）も実施。同工場は、災害

県警ヘリが負傷者を尾西食品ヘリポートに搬送

時の非常食として製造しているアルファ米が入った段ボール箱をヘリに積み込み、搬送可能な分量を確かめた。

ヘリポートは、第2工場の増築で昨年6月に運用を開始。災害時に直接、被災地に物資を届ける狙いで整備し

た。同工場の太田幸治製造部長は「椅子を取り払えば約5000食（約400kg）積めることが分かった。従業員が誰でも災害時に対応できるよう、訓練を重ねたい」と語っていた。

古川署の田久裕之署長は「河川敷や学校のグラウンドを離着陸で使う場合もあるが、安全確保など課題もある。継続的に訓練し、同工場と連携していきたい」と期待していた。